目次に戻る

国語科教育と日本語文化研究（Ⅱ）
―「日本語研究Ⅰ」における国語科教員基礎学力の扱いを中心に ―

A Study of Relations between Secondary School Japanese Language Teaching and Japanese Language and Culture Study (II)
-Through Dealing with Basic Learning Abilities of Japanese Language Teachers in Japanese Language Study I-

戸　田　利　彦
Toshihiko TODA

キーワード：国語科教員基礎学力・「日本語研究Ⅰ」・現代日本語研究・「気」の表現と文化

Ⅰ．はじめに―教職課程と「日本語研究Ⅰ」―

本稿では，比治山大学言語文化学科日本語文化コースの新カリキュラム[注1)]における日本語表現系の授業科目として独自の目的を持つ「日本語研究Ⅰ」[注2)]を，学習指導要領にある“教科に関する科目”としての国語学に関する科目（主に現代語）に該当する科目として期待される役割に，どのように適合させうるかについての視座を得るために，国語科教員志望者の基礎学力の確認及び向上の方策のあり方を中心に考察することを目的とする。具体的には，“「気」の表現と文化”を主要なテーマとする専門科目「日本語研究Ⅰ」の場合，“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）と，対応する授業名（新カリ）”（2015年4月3日）の“現代語の指標”にある“現代語の働きや特徴に関する基本的な知識”あるいは“現代語の文法的知識”を中心に，国語科教員になるための基礎学力をどのように扱いうるかについて，実践に基づきながら検討する。

「日本語研究Ⅰ」（新カリ2年次前期）は，筆者の担当する日本語表現分野の授業科目である。2016年度のシラバスには，言語文化学科及び日本語文化コースのカリキュラム全体も視野に入れて，以下のような【教育目標との関連】が記述され，また【到達目標】が設定されている。

【教育目標との関連】

1　日本語による表現力を高め，適切なコミュニケーション能力を身につける

2　日本文化を深く理解し，それを継承・創造・伝達する力を養う

【到達目標】

「気」の表現と文化について考察することを通して，日本語語彙の特徴及び言葉と文化のつながりについて理解できる

一方で，当授業科目は，言語文化学科日本語文化コースの教職課程（中・高一種免許（国語）／国語学（音声言語及び文章表現に関するものを含む。））に関する科目である。コース内で設定された“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）と，対応する授業名（新カリ）”（2015年4月3日）における本科目（教職必修以外）の，主として〈現代語〉としての位置付け･役割は，以下の通りである。

〈現代語〉

項目：教材研究・教材分析力／指導内容に関する領域／国語学に関する領域／現代語

現代語の指標：現代語の働きや特徴に関する基本的な知識を備えている／現代語の文法的知識を備えている

また，上記に加えて，参考として，中学校及び高等学校の学習指導要領の内容や教材が以下のように示されている。

中学校学習指導要領の内容や教材（参考）／記述の一部（例）【　　】内は領域名:【読むこと】【伝統的な】（音声･話し言葉と書き言葉，共通語と方言，敬語，世代間の使用差）（語句･語彙，単語・文・文章）

高等学校学習指導要領の内容や教材（参考）／記述の一部（例）【　　】内は「国語総合」の領域名【A／B】は「現代文A／B」「古典A／B」を表す：科目名「国語総合」【伝統的な】P30～語句の構造（漢語の構成など），語彙の構造（和語・漢語・外来語），調査・分析・報告などの活動，漢字の音訓，言葉の使い分け／科目名「国語表現（現代文A／B)」【伝統的な】P30～文･文章の組み立て･語句の意味，用法，表記，語彙，P34 文化審議会答申「敬語の指針」5種の敬語【A／B】

「日本語研究Ⅰ」（新カリ2年次前期）では，前述の教育目標との関連で示しているように，日本文化を深く理解することをあげている。授業の到達目標は，日本語語彙の特徴と言葉と文化のつながりを理解できることとしている。したがって，授業内容もいわゆる現代日本語学のみならず，言語文化論的な要素を持たせており，歴史的な観点からの理解も促すために，一部ではあるが『日本書記』『源氏物語』『平家物語』『太平記』などの古典作品も教材として扱っている。

そこで，古典語及び古典文学関係の授業科目の位置付け・役割をそれぞれ示しておくと，以下の通りである。

〈古典語〉

項目：教材研究・教材分析力／指導内容に関する領域／国語学に関する領域／古典語

古典語の指標：古典語の働きや特徴に関する基本的な知識を備えている／古典語の文法的知識を備えている／日本語の音韻，表記，語彙，文法の歴史的変遷に関する知識を備えている

上記に加えて，参考として，中学校及び高等学校の学習指導要領の内容や教材が以下のように示されている。

中学校学習指導要領の内容や教材（参考）／記述の一部（例）【　　】内は領域名:【読むこと】【伝統的な】（外国との関係について理解することができる，言葉の継時的変化）

高等学校学習指導要領の内容や教材（参考）／記述の一部（例）【　　】内は「国語総合」の領域名【A／B】は「現代文A／B」「古典A／B」を表す：科目名「国語総合」【伝統的な】P30～語句の構造（漢語の構成など），語彙の構造（和語・漢語・外来語），調査・分析・報告などの活動，漢字の音訓，言葉の使い分け／科目名「古典A／B」【伝統的な】P30～歴史的仮名遣い，活用，助詞・助動詞などの意味・用法，係り結び，敬語の用法，古文を読むことに役立つようにする【A／B】【伝統的な】言葉の成立と変遷（外国語の流入・定着など語彙の歴史的経緯など）

〈古典文学〉

項目：教材研究・教材分析力／指導内容に関する領域／国文学に関する領域／古典文学

古典文学の指標：歴史的背景をふまえて古典文学作品を鑑賞し，作品の個性と価値を理解することができる／古典文学の文学史的知識を備えている

上記に加えて，参考として，中学校及び高等学校の学習指導要領の内容や教材が以下のように示されている。

中学校学習指導要領の内容や教材（参考）／記述の一部（例）【　　】内は領域名:【読むこと】【伝統的な】（外国との関係について理解することができる）（音読・朗読，歴史的背景を踏まえた読み，古典の一節を引用するなどして簡単な文章を書く）（教材例）万葉集・古今和歌集・新古今和歌集・竹取物語・枕草子・徒然草・平家物語・奥の細道など

高等学校学習指導要領の内容や教材（参考）／記述の一部（例）【　　】内は「国語総合」の領域名【A／B】は「現代文A／B」「古典A／B」を表す：科目名「国語総合」【読むこと】P24～表現の仕方に注意したり，要約や詳述をさせたり，想像力を働かせたりしながら読み味わい，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしていく（教材例）宇治拾遺物語・古今著聞集・十訓抄･土佐日記･今昔物語･伊勢物語など／科目名「古典A／B」【A／B】P73～語句の意味，用法，文の構造の理解，構成や展開に即した内容理解，人間・社会・自然などに対する思想や感情を捉え，ものの見方・考え方を豊かにする（中学以外の教材例）方丈記・大鏡・源氏物語・更級日記・紫式部日記・仮名序・宣長の評論・無名草子・無名抄など

「日本語研究Ⅰ」は，主として文化論的な語彙論に関する講義科目ではあるが，教員による講義の他，司会担当，指定質問者も含めて受講者によるグループ調査発表を通して，高い日本語表現力，適切なコミュニケーション能力を身につけ，日本文化を深く理解し継承・創造・伝達する力を養うことを目指している。したがって，上述の“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）”と大きな齟齬は生じることはない。むしろ，両者の目指すところは極めて類似しているといえる。

筆者の専門は，日本語学であり，具体的な担当科目は，「日本語学入門」（新カリ1年次前期）「日本語表現演習」（旧カリ3年次前期）「日本語学演習」（新カリ3年次前期予定）などである。また，日本語教師にとっての教えるための日本語学を講じることもある。具体的な担当科目は，「日本語教材研究」（旧カリ3年次後期／新カリ3年次後期予定）などである。したがって，外国人にではなく日本人にという対象の違い，あるいは，小学校の国語は範囲外であるという内容上の違いはあるが，国語科教員にも教えるための日本語学（国語学）が存在するのは当然であると考える。まして，日本語の母語話者であり，また，その模範となるべく，日本語に関する高度な知識と技能を身につけた存在となるためには，中学校・高等学校の国語科教員には日本語教師以上に教えるための日本語学は必須である。

“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）”の国語学に関する領域／現代語については，本来，大学レベルの日本語学関係の授業を受講し，単位を取得できたならば，習得できるはずのものである。また，‘動詞の活用’‘話し言葉と書き言葉の違い’などの基本事項は，本来，教職志望の有無にはかかわらず，高等学校段階までに身につけておくべきものである。筆者の基本的な立場は，これら大学あるいはそれ以前の段階における日本語に関する基礎の上に，大学における高度な日本語学や専門的な国語科教育に関する授業が成り立つというものである。しかしながら，敢えて基礎学力を確認しつつ受講者を知的に刺激し，そこを契機にさらなる真の向上を目指すのは有効と考える。

その意味で，特に教職志望の学生にとっては，高度な知識と技能を身につけ，将来教壇に立つためには，日本語学関係の授業を受講する前提として，日本語学に関する基礎学力は必要不可欠であり，また，授業を通したその確認及び向上が求められることになると考える。

そこで，以下，一般学生も含めて，教職（国語）志望学生を中心に，一般学生も含めた受講者を

想定した場合[注3)]の日本語学に関する基礎学力の確認及び向上の方策について，新カリキュラムの「日本語研究Ⅰ」という授業における実践を例に論じることにする。

Ⅱ.「日本語研究Ⅰ」の授業運営と基礎学力の確認及び向上の方策

新カリキュラムの「日本語研究Ⅰ」の授業運営は，旧カリキュラムの「日本語研究Ⅱ」と基本的に同じ方法をとっている。以下，その概略を記しておく。

第1回目から第5回目までの授業運営は以下の通りである。

「日本語研究Ⅰ」は，形式上は講義科目に属するが，受講者による発表を中心に，演習的要素を取り入れている。全15回の中で，第1回のオリエンテーションから第5回までは，「気」の表現と文化に関する基本事項の確認を中心に講義を行う。一方で，6回目以降にはじまるグループ発表のグループ分けや司会・指定質問の担当者の決定，発表の準備などをする期間としている。

6回目以降の授業運営は以下の通りである。

授業の最初に，まず，その日のテーマについて教員が15分程度で説明を行う。次いで，15分程度でグループ発表を行う。発表の内容は，「気」の表現と文化に関する主要論文や著書の一節の要約を中心とするが，必ず担当した資料そのものに対してグループとしてのコメントを付し，また，日本人の精神空間（自然・宇宙観／対人・社会意識／認識・思考法／道徳意識／美意識など）との関係について，担当者一人ひとりに考察結果を記述するように求めている。

発表は毎回原則2組としている。各発表の司会は次回の発表者がそれぞれ前半・後半を担当し，また，指定質問は前回の発表者が2組に対して行うことにしている。質問等は，指定質問者以外にも自由にできる。また，発表の直後に約5分間の記録カードへの記入時間を設けて記入させることで，時間の関係上質問等ができなかった学生に対して次回にコメントを返したり，受講者の理解状況を把握して後に補足説明したりしている。さらに，時間に余裕がある場合は，受講者をグループ分けして，グループ内で記録カードの記述内容を読み上げ合い，情報あるいは意見の交換を行うことにしている。

質疑応答の最後に，学生の司会者が教員の筆者に講評を求めることになっている。筆者は，残り時間を勘案しながら，まず，発表資料や発表内容の批正を行った上で，発表者のコメントや考察内容を中心に講評を行う。発表内容によっては，次回に再度，補足説明，やり直し等を求めることもある。しかし，原則として前年度までの受講者の作成資料を渡すことにしており，それを理解した上で，それをしのぐ発表を求めることにしているため，受講者は概ね資料をよく整え，充実した発表を行う。尚，第10回目は後半に中間まとめ（「気」の表現の種類・量），14回目及び15回目には全体のまとめ（「気」の表現の発達理由（①言語的理由②気象環境的理由③思想・宗教的理由④伝統文化的理由⑤社会心理的理由））を行うことにしている。また，第11回目は，“日本人と「気」の文化”と題して，次年度2月実施予定の日本語文化研修（3年次通年専門科目）の内容[注4)]を事前に紹介する中で，「気」の文化の実際について考察することにしている。

以上のような授業運営を行う「日本語研究Ⅰ」において，筆者が受講生に対して基礎学力の確認及び向上の方策を実施するとすれば，授業最初のテーマに関する説明時，あるいは発表後の講評時が考えられる。

後者の時間に，適宜発表資料や発表内容に関連させて基礎学力の確認をし，向上を図ることも不可能ではない。しかし，上の学年の場合，専門的な考察をなすべき時間に，基礎学力に関するある程度まとまった指導をするのは授業全体のレベルの低下にもつながりかねず有効とはいえない。そ

こで，筆者は，2015年度の旧カリキュラムの「日本語研究Ⅱ」（3年次後期）では，教職学生を中心とした日本語学に関する基礎学力の確認及び向上の方策を，授業の最初のテキスト用ハンドアウトの読み込み時[注5)]に意識的に実施するようにした。

しかしながら，2016年度には，コース分属，すなわち日本語文化コースか国際コミュニケーションコースかの選択を行った直後の3セメスター（2年次前期）の開講となり，従来の3年生を中心とした受講学生と比較した場合のレベルの差及び受講人数の増加に伴う発表グループ数の増加という問題点が生じた。そこで，この状況の変化を考慮し，レベルの高い共通テキストとしてのハンドアウト[注6)]の使用は「日本語研究Ⅰ」では行わず，発表後の講評時に，適宜発表資料や発表内容に関連させて基礎学力の確認をし，向上を図ることにした。

Ⅲ．発表後の講評時における基礎学力の確認及び向上の方策の実際

ここでは，受講者の発表に対する講評時に行った基礎学力の確認及び向上の方策の実際を，第6回から第13回のそれぞれに分けて報告しておく。基礎学力に関する指導項目は，単独で取り立てて行うことはせず，当授業の目標の達成に資する範囲内で毎回2～3項目を適宜選定した。その際，上述の“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）と，対応する授業名（新カリ）”（2015年4月3日）における本科目（教職必修以外）の位置付け・役割を参考に取り上げた。指導は，時間的な制約を考慮し，受講者に基礎学力の重要性を気づかせ，自ら復習させることに主眼を置き，可能な限り簡潔に行った。

以下，各回の発表資料のタイトルを〈　　〉内に，ねらいを【　　】内に示した上で，（　　）内にその回で受講生が発表資料の中で結果的に扱っていた〈現代語〉〈古典語〉〈古典文学〉についての基礎学力の確認及び向上に関する事項の中で主たるものと，その中から筆者が講評時に基礎学力の確認及び向上のために指導項目として取り上げた事項の具体的内容を記すことにする。

尚，第11回は受講生による発表はなく，教員が「気」の文化の発祥地と考える飛鳥をテーマに授業を行った。具体的には，飛鳥の古墳や石像物に関する資料を提示し，飛鳥地域が日本創生の舞台となった7世紀が，道教や陰陽五行思想などの受容と活用によって「気」の文化の発生期にもなった点について考察した。その中で，本授業で扱う〈古典語〉との関係の中で，中学校学習指導要領の内容や教材の【読むこと】【伝統的な】（外国との関係について理解することができる，言葉の継時的変化）及び高等学校学習指導要領の内容や教材の【伝統的な】言葉の成立と変遷（外国語の流入・定着など語彙の歴史的経緯など）を考慮して，主たる事項及び指導項目の具体的内容を記すことにする。また，〈古典文学〉との関係の中で，中学校学習指導要領の内容や教材の“【読むこと】【伝統的な】（外国との関係について理解することができる）”及び高等学校学習指導要領の内容や教材の“【読むこと】P24～表現の仕方に注意したり，要約や詳述をさせたり，想像力を働かせたりしながら読み味わい，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしていく”“【A／B】P73～語句の意味，用法，文の構造の理解，構成や展開に即した内容理解，人間・社会・自然などに対する思想や感情を捉え，ものの見方・考え方を豊かにする”を同様に考慮して記すことにする。

【第6回】〈「気」の慣用句の結合度〉【日本語語彙：現代】（慣用句，連語句，格言・ことわざ，歴史的・社会的価値観，格助詞，名詞，形容詞，動詞，自動詞・他動詞，述語部分，反意語，連体修飾，転生名詞化，一語化，主述逆転，受身・使役表現，使役形，迷惑受身，否定形，日本人らしい遠回しな言い方，日本人のアイデンティティー，日本人と「気」，自己の精神状態／慣用句と格言・ことわざとの相違点及び日本語の自動詞・他動詞）／〈キリシタン資料における「気」〉【日本語語

彙：歴史】（キリシタン資料，「気」の語義，『日ポ辞書』，「気」の単独例，字音語，複合語，意味分類，語形，『広辞苑』，『日本国語大辞典』，『時代別国語大辞典』，「気」を使用した比喩的語句，『羅西日辞書』，『ラポ日辞典』，高頻度の使用状況，黙想書，ローマ字本，修道者，禁教令，文語的表現，口語的表現，人間の心の動き，『〈気〉の比較文化』，自分の心や身体，人間関係や場，微妙な感覚的・直観的な心情や状況・状態／キリシタン資料の言語資料としての重要性及び近世の様々な辞書・辞典）

【第 7 回】〈「気」の慣用表現に関する研究―定義と分類―〉【日本語語彙：現代】（慣用表現，単純語，複合語，形容詞，形容動詞，動詞，語頭，慣用句，日本人の精神空間など／動詞・形容詞・形容動詞（用言）と名詞（体言）の相違点及び「用」と「体」の語の由来）／〈精神的作用に関わる「気」を構成要素に持つ慣用表現の意味分類〉【日本語語彙：現代】（慣用表現，意味分類，日本人の微妙な心理，日本的発想，辞典，格助詞，位相，構成語，活用語，多義，単純語，複合語，四字熟語，慣用句，感情（情動・心情・気分），他律他人志向，情緒面・感情面の表現／慣用句・慣用表現・慣用的表現の定義の違い及び「気」を構成要素に含む四字熟語（意気投合・意気軒昂など））

【第 8 回】〈「気」の慣用表現に関する研究―“気が引ける”の意味用法を中心に―〉【日本語語彙：現代】（感情表現，主要な辞書，意味用法，用法，文型，一人称，過去形，三人称，文法，連用修飾，連体修飾句，『国語大辞典』，『広辞苑』，『日本国語大辞典』，『学研国語大辞典』，用例，行動規範，相対的な力関係，相手との信頼関係，連体修飾，連用修飾語，否定の表現，名詞句，日本人の思考の特徴，日本人の精神，読み手，聞き手，「空気を読む」という文化など／連体修飾と連用修飾の違いと品詞及び名詞句・形容詞句・動詞句）／〈「気」の慣用表現に関する研究―“気がとがめる”の意味用法を中心に―〉【日本語語彙：現代】（感情表現，主要な辞書，意味用法，用法，文型，一人称，過去形，三人称，文法，連用修飾，連体修飾句，『国語大辞典』，『広辞苑』，『日本国語大辞典』，『学研国語大辞典』，用例，行動規範，自己の良心，他者への罪の意識，連体修飾，連用修飾語，否定の表現，名詞句，使用頻度，出現率，『感情表現辞典』など／「とがめる」の語尾変化（下一段動詞の活用語尾）と動詞の 5 種類の活用・6 種類の活用形及び日本の現代の代表的な辞書・辞典）

※アンケート調査①の実施（授業開始時）

【第 9 回】〈日本における気の思想の流れ―古代―〉【日本語語彙：固有文化と外来文化】（日本語の語種（和語・漢語・外来語・混種語）と外来文化，日本人の精神性，身体観，陰陽説，五行説，日本陰陽道，訓読，音読，『日本書紀』の冒頭，天地開闢論，『淮南子』，陰陽二気，宇宙論，日本神話，世界起源説，『源氏物語』（桐壺・須磨・夕霧・若菜・椎本），喜怒哀楽，物のあわれ，自然の一部，「もののけ」，「けはひ」，「いき」，「こころばへ」，「しるし」，自然との調和など／「もののけ」「けはひ」の意味及び密教全盛期と平安貴族・紫式部）／〈日本における気の思想の流れ―中世―〉【日本語語彙：固有文化と外来文化】（「気」の読み方，意味の変化，日本人の意識の変化，日本人の意識構造，日本人の精神性・心理性，『平家物語』（大臣流罪・紅葉・文覚被流・西光被斬・入道死去・御産・還御・小督・一門大路渡，鹿谷・泊瀬六代），「き」，「け」，「物の怪」，「物気」，「けしき」，「きしょく」，『太平記』，心と気，時間的契機としての「気（機）」，『風姿花伝』，「気色（けしき）」，陰陽二気，陽気，陰気，日本の身体運動文化，日本人の心，近代的自我，世阿弥，能楽の演技，戦場の場面，武士，「気」の慣用表現など／日本人の非分析的感覚重視志向・美意識及び禅宗（中国生まれの仏教）全盛期と武家社会の文化（武道・茶道・香道・能など））

【第 10 回】〈日本における気の思想の流れ―近世・近現代―〉【日本語語彙：固有文化と外来文化】（日本語の語種（和語・漢語・外来語・混種語）と外来文化，日本的な「気」論，「気」の宇宙論の追求，「気」の物理的作用，人間の側に近い所の気，心の側に近い所の気，日本人の精神性・身体性・

人間関係，対人関係，近松作品における「気」，『曽根崎心中』，「悋気」，「気遣ひ」，「気がせく」，「心意気」，思想としての「気」，澤庵禅師，『理気差別論』，朱子学，理気二元論，伊藤仁斎，気一元論，熊澤蕃山，『集義和書』，理気渾融の思想，貝原益軒，実践としての「気」，武芸，「悟り」の境地，「気」の概念，座禅，内観，宗教的瞑想修行，仏教的な「機」の概念，剣術，「間」，「心を発すべき間」＝「気」の関係，柔術，身体運動の質，気との関連，「気」の一般的な特性，心身分離性（「元気」「病気」「気分」など），不随性（「気が小さい」「気が強い・弱い」「気性」など），現在性（「気まぐれ」「気の向くまま」「気が乗る・乗らない」「気を落とす」など），間主体性（気が合う・合わない），人と人との間に存在，儒学研究の一環など／江戸時代の儒学（朱子学・陽明学）及び18世紀初頭の商人文化）／中間まとめ

【第11回】〈日本人と「気」の文化―高松塚古墳及びキトラ古墳の壁画に見る「気」の思想―〉【日本文化：飛鳥と「気」の思想】（古墳築造時期（7世紀末～8世紀初頭），被葬者，天文・地理，陰陽五行思想，陰陽寮，古墳壁画，宇宙観，四神（玄武･青龍･朱雀･白虎）図，4人一組の男女群像（高松塚古墳），十二支像（キトラ古墳），日月図，星宿図（天文図），天武･持統天皇陵（八角墳），「聖なるライン」，道教の影響，斉明天皇，飛鳥の石像物（猿石･二面石･亀石･亀形石造物･陰陽石など），日本陰陽道など／陰陽の思想と技術の受容･活用及び「気」の文化の発生期と日本の創成期の関係）

【第12回】〈朱子学の世界観―気と生死／気と鬼神／祖先崇拝の問題／気と運命・個性／気質の変化／心の動きも気の作用―〉【日本語語彙:固有文化と外来文化】（朱子学，南宋の朱熹，儒学の体系，理気世界観，祖先崇拝，祖先祭祀，“気のせい”，「理気二元論」，「性即理」，「輪廻転生」，仏教的な考え方，儒教的な考え方，「孝」，お盆と灯篭流し，お彼岸など／「気」の慣用表現としての“気のせい”の中国における原義及び日本の祖先崇拝・祖先祭祀と儒教（朱子学）の「気」）〈日本語の中の性差のゆくえ〉【日本語語彙（位相・分野）：男性語・女性語】（日本語の性差，近代化としての性差，脱性差化としての境界域現象，性差の再編成，女ことば・男ことば，差別表現，「自己性差化」，「対象性差化」，欧米言語，日本語の自称詞，名詞文，断定の「だ」，主文述語，表層構造，断定発話意図，「の文」，「わ文」，感嘆文，感嘆の終助詞，発話行為，上昇調，明治維新以後の近代化，中央集権的封建制度，階級意識，中流意識層，男女の言葉の違い，イントネーション，他言語との表現の違いなど／日本語の位相（性別・年齢・地域・場面・職業・階層など）の違いによる表現の多様性及び男性語・女性語の差異に基づく歌舞伎・歌劇・お笑い等の文化）

【第13回】[注7)]〈最新データに見る日本人の言語行動―年賀状に関する調査をもとに〉【言語行動：挨拶文化】（日本人の言語行動，年中行事としての年賀状，日本人らしい風習，電子メールの普及，現物調査，アンケート調査，年齢差，高齢層，若年層，年賀状の調査（現物調査：文面の配置（伝統型：縦置き縦書きスタイル／縦置き横書きスタイル・横置き横書きスタイル）・文面が日本語か英語か（賀詞／添え書きの言葉）／アンケート調査：賀詞（「謹賀新年」「迎春」などの漢語／「あけましておめでとうございます」／「A Happy New Year」）･電子メールの割合（年賀状ハガキ）･元旦に届くように出すか（新年の挨拶／定型的な習慣）・自分から出すか・敬語を使うか・年の表記（年号･西暦）),「ウチ」と「ソト」の感じ方の違い／話し言葉と書き言葉／日本語の語種（和語･漢語・外来語・混種語）及び日本人の自然観（自然との一体化及び霊力親愛志向）・日本人の対人・社会意識（他者・集団主義志向））

※第14回にアンケート調査②の実施（授業終了時）

以上のように，国語科教員になるための国語学（日本語学）の〈現代語〉に関連する事項は，専門科目の「日本語研究Ⅰ」の中で，現代語の文法知識（第6回／第7回），話し言葉と書き言葉・

世代間の使用差・敬語（第 13 回），語彙の構造（和語・漢語・外来語）（第 9 回／第 10 回），語句の意味，用法（第 8 回）など，語彙・文法を中心に，直接的に取り扱われている。また，授業の到達目標としている“日本語語彙の特徴及び言葉と文化のつながり”の理解を目指す中で，実際には間接的にも様々な事項が触れられているのはいうまでもない。

一方で，結果的にではあるが，古典語及び古典文学に関連する事項も，古典語の文法的知識，日本語の語彙の歴史的変遷，語彙の構造（和語・漢語・外来語），言葉の成立と変遷（外国語の流入・定着など語彙の歴史的経緯など），古典文学の文学史的知識，教材例としての平家物語・源氏物語，語句の意味，用法などを中心に扱っている。また，人間･社会･自然などに対する思想や感情を捉え，ものの見方・考え方を豊かにするという事項に関しては，「日本語研究Ⅰ」が到達目標としている“「気」の表現と文化について考察することを通して，日本語語彙の特徴及び言葉と文化のつながりについて理解できる”に符合するものである。

専門科目の特性や時間的な制約などを考慮する必要はあるが，教授者が“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）”を意識しつつ，指導事項を整理･精選し，授業を工夫することで，国語科教員の基礎学力の確認及び向上は可能であり，むしろ，大学レベルの真の意味での基礎学力が身につくと考える。

Ⅳ．受講生に対する基礎学力の確認及び向上の方策に関するアンケート調査

1．アンケート調査の概要

「日本語研究Ⅰ」の第 1 回目の授業のオリエンテーションの中で，授業の中で“国語科教員の基礎学力の確認及び向上”も意識的に行うことを告知した上で，以後，実践を行った。その後，学期の中盤及び期末に，受講生に対する基礎学力の確認及び向上の方策に関する 2 つのアンケート調査を行った。目的は，〈アンケート調査①〉では日本語の文法を中心に受講生の自己の基礎学力への意識を調査することに，〈アンケート調査②〉では教職（国語）志望受講生に筆者の授業実践への意見・感想を求めることに置いた。日時・対象・方法・内容については，以下の通りである。

〈アンケート調査①〉
日時：2016 年 6 月 2 日（第 8 回授業の開始時）
対象：「日本語研究Ⅰ」受講者 41 名[注 8)]
方法：授業コメントカード（記録カード）への記名式記述回答
内容：古典文法に関する知識と力／ 10 品詞をはじめとする現代の日本語の文法に関する知識と力
質問項目：
Ⅰ：古典文法に関する自分の知識と力について 30 ～ 50 字でコメントしてください。
Ⅱ：10 品詞をはじめ現代の日本語の文法に関する自分の知識と力について 30 ～ 50 字でコメントしてください。
※教職（国語）志望受講生は，教職への意欲･熱意を 5 段階（A：大変高い／ B：まあまあ高い／ C：普通／ D：あまり高くない／ E：大変低い）で記してください。

〈アンケート調査②〉
日時：2016 年 7 月 14 日（第 14 回授業の終了時）
対象：「日本語研究Ⅰ」受講者の中の教職志望者 16 名

方法：アンケート用紙（A4 判 1 枚）への無記名式の選択及び記述回答

内容：教職（国語）への意欲・熱意／基本事項の復習をも意図して実施された授業（「日本語研究Ⅰ」）の役立ち度／高校 2 年生レベルの基本事項の確認及び向上のための復習も意図して実施する授業に関する必要・不要論

質問項目：

Ⅰ：今現在の時点で，教職（国語）への意欲・熱意はどの程度ですか。

1 ～ 5 の該当する数字に○を付した上で，その理由についてコメントしてください。

1：大変高い（A 段階）　2：まあまあ高い（B 段階）　3：普通（C 段階）

4：あまり高くない（D 段階）　5：大変低い（E 段階）

Ⅱ：「日本語研究Ⅰ」は教職（国語）の内容に関連する科目であり，高校 2 年生までには習得しておきたい文法（品詞／活用形／動詞の活用の種類など）・語彙（和語・漢語・外来語／言葉の使い分け（男性語・女性語・賀詞）など）・表現（慣用表現／四字熟語／世代間の使用差など）を中心に，基本事項の確認・向上のための復習も意図して実施されましたが，どの程度役に立ちましたか。

1 ～ 5 の該当する数字に○を付した上で，その理由についてコメントしてください。

1：大変役に立った　2：まあまあ役に立った　3：普通

4：あまり役に立たなかった　5：ほとんど役に立たなかった

Ⅲ：大学の専門科目の中で，教職（国語）以外の一般学生も含めて，特に教職（国語）志望受講者を意識して，高校 2 年までに習得しておくべき基本事項の確認・向上のための復習も意図して授業を行うことについて，どう思いますか。必要･不要論を中心に，自由に記述してください。

2．アンケート調査の結果及び考察

〈アンケート調査①〉

前期中盤の時期で，主として語彙・文法・意味・表現の観点から現代の“「気」の表現”について考察し終え，次回から歴史的な観点から主として古典文学作品を通して「気」の文化の流れを扱い始める直前の回の授業開始時に，古典文法に関する知識と力及び 10 品詞をはじめとする現代の日本語の文法に関する知識と力に関して，記名式の授業コメントカード（記録カード）へ，自己の状況を自由に記述するものであった。

この中で，特に教職（国語）志望受講者の代表的なコメントとしては，“古典文法”については，「大学受験の際に知識と力をつけたので基本的な部分はまだある程度記憶に残っている」といったものが，また，“現代の日本語の文法”については，「古典文法よりは理解できていると思う」などがあった。

一方で，それぞれ「現代国語は得意だったが，古文･漢文の読解も含めて古典文法には自信がなく，かなり復習が必要である／高校時代の方が古典作品や古典文法に接する時間があり，力は低下していると思う」，「品詞の分類は知識はあるが，実際に分類するとなると完全にはできない／品詞分類の中では副詞と助詞が苦手である」というように，かなり個人差が見られた。

特に教職（国語）志望受講者には，教職への意欲・熱意を 5 段階（A ～ E）[注 9)] で付した上で，コメントを求めたが，平均値は 3.31 であり，調査①と同じ数値であった。A 段階とした受講生が古典文法，現代の日本語の文法について「自分でも参考書や問題集で復習している」とコメントする一方で，下位の段階の受講生の中には「自信はなく，教職への迷いがまだあるので，積極的にもなれない」と知識不足や力不足及び積極的な復習へ逡巡が見られる場合もあった。教職への意欲・

熱意が現代の日本語の文法や古典文法に関する知識と力の十全さに直結している傾向が見られた。

〈アンケート調査②〉

期末のまとめの時期に，大学の授業における教職（国語）を意識した基本事項[注10)]（高校2年生レベル⇒採用試験の国語そのものの問題のレベル）の確認及び向上のための復習のあり方に関して，特に教職（国語）志望受講者を対象に，無記名式のアンケート用紙を用いて，質問項目に対して選択肢から選ぶと共に自由に記述するものであった。

質問項目Ⅰは，約40日前のアンケート調査①でも行ったもので，教職への意欲・熱意を，5段階（A～E）から選択するものであったが，16名の平均値は3.31であり，調査①の数値と同じであった。比較的意欲・熱意の高い受講生が集まり，教職への意志を集団全体として持続していた。一方で，調査①の段階と同様に，少数ではあるが“あまり高くない”“大変低い”という段階の教職志望受講生もおり，“国語科教員の基礎学力の確認及び向上”の必要性と共に学力の多様性ゆえのその実現の困難さを改めて認識させられた。

質問項目Ⅱは，基本事項の復習をも意図して実施された授業の役立ち度を，5段階から選択した上で，理由について自由に記述するものであったが，16名の平均値は3.69であり，マイナスの評価をした回答はなかった。筆者としては，大学レベルの授業内容の中で，結果として基本事項にふれるようにさせると共に，講評時にいくつかの項目を取り立てて話題にしたにすぎないが，教職志望受講者には意外と役に立ったようである。採用試験に合格し，教壇に立つための教職（国語）の学びは，まずは，授業者と受講者の双方が基本事項を意識化すること，その上で大学の通常の授業を協働しながらつくりあげていくことで具現化しうるものと考える。

質問項目Ⅲは，高校2年生レベルの基本事項の確認・向上のための復習をも意図して実施する授業について，必要・不要論を中心に，自由に記述するものであったが，「単なる復習ではなく，大学レベルの専門的な学びに必要かつ十分な事項を中心に学ぶという前提ならば，大いに必要であり，また有用である」という内容の記述が多く見られた。総じて，実践そのものに対しては，好意的な結果であった。一方で，その学びへの意識は質問項目Ⅰの教職（国語）への意欲・熱意と連動する傾向が見られ，個人差が大きかった。3セメスター（2年次前期）の段階では，一般に明確な進路決定を行いきれないのは無理からぬことであり，特に教職となると相当の決意と努力を要求される点で，逡巡する学生がいても不思議ではない。その場合，基本事項の復習への意識は，高いものとはならない。授業では，目的志向性の高い学習の功罪を見極めると共に，大学レベルの基礎学力の確認・向上が求められるといえよう。

Ⅴ．おわりに―国語科教育と「日本語研究Ⅰ」―

本稿では，基礎学力の確認及び向上の方策に関して，実際の授業の中でその具体的な方策を試験的に実施し，また，アンケート調査を通して受講生の意識や意見を考察した。方策を講じるにあたっての留意点として，以下の4点を指摘しておく。

1：特に国語学（日本語学）の現代語は，中学校及び高等学校の学習指導要領の内容や教材と具体的に一致あるいは近似するものが多く，結果的にではあっても，通常の授業の中である程度ふれることは可能であり，意識的に取り上げることはさらに効果的である。

2：授業者及び教職（国語）志望受講者の双方が，“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）”について，それぞれの専門領域及び関連する領域との関係を可能な限り事前に把握しておくことが必要かつ有用である。特に国語学（日本語学）の現代語は，上記1の留意点で示したように，学習指導要領の内容や教材と具体的に一致あるいは近似するものが多く，工夫次第

では，中・高と大学の接続連携を視野に入れることが可能で，教職（国語）志望受講者にとって専門及び教職（国語）の両学びに有益である。

３：教職（国語）志望受講生のコメントでも指摘されていたように，基本事項の確認及び向上のための復習は，基本事項を専門的な新たな視点から学び直す中で行うのが望ましく，有効である。例えば，今回の実践のように，動詞の活用の種類や活用形に関しては，いわゆる学校文法（橋本文法）に関する考え方[注11)]について話題にしたり，品詞に関しては，「健康」の品詞論的な整合性（「名詞」であり「形容動詞の語幹」でもある）に基づく「形名詞」[注12)]としての認定という説を紹介したりするように，専門レベルでの具体的な考察を通して復習を行う

４：「日本語」と「日本文化」の融合を目指す授業の中で，〈現代語〉を中心に，〈古典語〉〈古典文学〉とも関連した内容を扱うことによって，総合的かつ多面的に基本事項の確認及び向上のための復習を行い，国語科教員になるための基礎学力を養うことは可能であり，また有効である。

本稿では，日本語文化コースのカリキュラムにおいて日本語表現系の授業科目に位置付けられている「日本語研究Ⅰ」を取り上げ，〈現代語〉を中心に，国語学（日本語学））関係の基礎学力の確認及び向上の方策について考察した。大学の一般的な授業科目，ましてや専門科目に関する基礎学力についての筆者の基本的な立場は，高等学校段階までに習得しておくべきものであるというものである。教職（国語）志望者の基礎学力に関しても同様である。しかしながら，上記の１～４の点に留意し，敢えて大学の専門科目の中で基礎学力を養うならば，それは特に教職（国語）志望者にとって極めて有意義であると考える。

先述した通り，この授業の目標とするところは，日本語による表現力を高め，適切なコミュニケーション能力を身につけることであり，また，日本文化を深く理解し，それを継承・創造・伝達する力を養うことである。これらの目標に近づこうとする過程の中で，基礎学力が自然と確認され，また向上していくという理想の実現ははかれると考える。そのためには，授業者が，個々の専門分野や個人の研究の特性を活かしながら，基礎学力の重要さについて学生に意識的に“気づき”を与え，また，大学レベルの視点から受講者の基礎学力を知的に刺激することからはじめるのが有効である。筆者としては，まずは，教職に関係する国語学（日本語学）系の１科目である「日本語研究Ⅰ」において，基礎学力の確認及び向上のための方策という視点から，今後も地道に実践を続けることに注力していきたい。

注

１　新カリキュラムでは，卒業後の進路を意識したディプロマポリシーに基づいて，カリキュラムポリシー及びアドミッションポリシーが設定されることになった。

２　教育課程表において「日本語研究Ⅰ」は，科目区分の日本語･日本文学･日本文化に属している。また，合わせて掲載されているカリキュラムマップには，〈日本語学〉の系統（日本語学入門（1年次前期）⇒日本語概論（1年次後期）⇒日本語研究Ⅰ（2年次前期）⇒日本語研究Ⅱ（2年次後期））の中の科目として位置付けられている

３「日本語研究Ⅰ」の前身にあたる「日本語研究Ⅱ」は，旧カリキュラムでは6セメスター（3年次後期）の専門科目であったが，2015年度は教職志望者の受講はなかった。今年度からは，新カリキュラムの3セメスター（2年次後期）と，従来よりも1.5セメスター分早い開講となり，教職志望者の受講は増加が予想されていた。実際の受講者数は約3倍の47名となり，教職（国語）志望者も16名となった。

4　第20回日本語文化研修として2泊3日で奈良県の飛鳥を訪問し，高松塚古墳・キトラ古墳に見られる陰陽五行思想・道教などの影響を共通テーマに，日本人のこころの原風景及び日本という国の成り立ちについて学ぶことにしている。

5　授業の最初に，まず，共通テキストとしての“「気がふさぐ」の意味用法”という筆者書き下ろしのハンドアウトを約15分かけて全員で読み込んでいくかたちをとった。

6　ハンドアウトは，2015年6月13日に創価大学に於いて開催された「日本比較文化学会第37回全国大会」で口頭発表した“「気」の日本語文化論（Ⅲ）―「気がふさぐ」の意味用法を中心に―”の内容の一部であり，それに加筆・訂正を行ったものである。筆者が，論文としては未掲載の学会の発表資料の一部を敢えて授業の共通テキストとして使用したのは，旧カリの「日本語研究Ⅱ」が，【教育目標との関連】を，“創造力を磨き，豊かな発想力と未来に生きる人間性を養う”ことしていた点による。日本語文化の研究者として筆者が立て，また，学会に提起した未だ答えの確定していない仮説の検証を，受講者が教授者と共にリアルタイムに行う中で，創造力や発想力の鍛錬，また，未来を切り拓く人間性の滋養が可能と考えたことによる。

7　第13回目には，前半に〈甲子園とジェンダー―高校野球の社会学―〉【社会文化：スポーツとジェンダー】というテーマで発表が予定されていたが，担当者が受講を取りやめたため，筆者による解説に変更した。内容は，“なぜ女子高校生の硬式野球部はなく，また，なぜマネージャーにはなれても選手として甲子園を目指すことができないのか”という問いを出発点に，極めて日本的な文化ともいうべき日本の高校野球を「気」の文化の観点から考察してみようとするものである。考察の際に，高校野球にかかわる人々の自然観（自然との一体化及び霊力信愛志向），対人・社会意識（他者・集団主義志向），道徳意識（間人道徳主義・自己内修養志向），美意識（陰陽バランス・陰影志向）などを観点として設定した。その上で，高校野球に関してよく耳にする言説を取り上げた。具体的には，“甲子園には魔物がすむ／野球の神様が見てくれている”“犠牲バントできっちりランナーを進める／チームに迷惑をかけないよう，一生懸命がんばる”“練習後もひとり残って黙々とバットを振り続けていた姿が印象的だった／点差のついた9回裏2アウトランナー無しで，監督が，高校3年間毎日努力を続けてきた補欠の選手を，バッターボックスへ送り出す”“チームが甲子園出場を果たせたのは，洗濯，グラウンド整備，その他雑用で女子マネージャーたちが選手やチームを影で支え続けたからだ／走攻守そろったバランスのいいチームであるが，個々の選手もそれぞれが自分に与えられた役割を理解しており，チーム全体としてのバランスもいい”などである。これらの言説の背景として“日本の高校野球は「気」の文化の典型例である”という仮説を立てた。この仮説を検証すると共に，日本の“野球”とアメリカの“ベースボール”の相違点についても考察した。

8　当初の履修者名簿には47名が登録されていたが，6名が途中で受講を取りやめた。アンケート調査①の当日は取りやめ者以外全員が出席しており，回答率は100％であった。

9　調査②のⅠと同じ形式のもので平均値も結果的に同じ3.31であった。

10　採用試験の国語（中学校・高等学校）の教科そのものに関する問題のレベルは，一般的に高校2年生レベルであるという認識に基づいている。

11　いわゆる「学校文法批判」について簡潔に取り上げた。その際，筆者の卒業論文が「文法教育」に関するものであったこと，また，専門の日本語学の立場から，学校文法＝橋本文法というのは必ずしも正確ではないことも付け加え，誤解が生じないように配慮した。

12　寺村（1982）を参照のこと。

参考文献

赤塚行雄（1974）『「気」の構造』講談社

（1990）『「気」の文化論』創拓社

林　八龍（2002）『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究―身体語彙慣用句を中心として―』明治書院

江刺正吾・小椋　博（1994）『高校野球の社会学―甲子園を読む―』世界思想社

小倉紀蔵（2011）『韓国は一個の哲学である〈理〉と〈気〉の社会システム』明治書院

垣内景子（2015）『朱子学入門』ミネルヴァ書房

木村　敏（1972）『人と人との間―精神病理学的日本論―』弘文堂

（1994）『心の病理を考える』岩波書店

（2006）『自己・あいだ・時間　現象学的精神病理学』筑摩書房

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味　第１巻』くろしお出版

（1984）『日本語のシンタクスと意味　第２巻』くろしお出版

（1991）『日本語のシンタクスと意味　第３巻』くろしお出版

中村　明（1993）『感情表現辞典』東京堂出版

芳賀　綏（2004）『日本人らしさの構造』大修館書店

（2007）『日本語の社会心理』人間の科学新社

前林清和・佐藤貢悦・小林　寛（2000）『〈気〉の比較文化：中国・韓国・日本』昭和堂

宮地　裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院

森山公夫（2014）『躁と鬱』筑摩書房

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説　国語編』東洋館出版社

（2009）『高等学校学習指導要領解説　国語編』教育出版

山本七平（1983）『「空気」の研究』文藝春秋

湯浅泰雄（1986）『気・修行・身体』平河出版社

（1991）『「気」とは何か：身体が発するエネルギー』日本放送出版協会

戸田利彦（1994-1998a）「日本語慣用表現に関する研究（Ⅰ）～（Ⅴ）」『教育学研究紀要』第40-44　第２部　中国四国教育学会

（1998b-2009）「「気」の慣用表現に関する研究（Ⅰ）～（Ⅺ）」『日本語文化研究』第1-11　日本語文化学会（日本語文化専攻・コース）

（1999）「精神的作用に関わる「気」を構成要素に持つ慣用表現の意味分類」（『日本語教育学の展開』奥田邦男先生退官記念論文集刊行委員会　渓水社）

（2014a）「「気」の日本語文化論（Ⅰ）―「気」の表現に見る文化論的特徴―」（『比較文化研究』No. 113，日本比較文化学会）

（2014b）「「気」の日本語文化論（Ⅱ）―メランコリー系の「気」の表現に見る文化論的特徴を中心に―」（『比較文化研究』No. 114，日本比較文化学会）

（2016）「国語科教育と日本語文化研究（Ⅰ）―“「気がふさぐ」の意味用法”の扱いを中心に―」（『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第２号，比治山大学・比治山大学短期大学部）